

## 「呪われた企て」

### コーマック・マッカーシー『越境』における「剥き出しの生」と証人の責務

山口 和彦\*

英語学・英米文学・文化研究分野

(2014年8月29日受理)

#### 要 旨

コーマック・マッカーシー (Cormac McCarthy, 1933-) の『国境三部作』(*The Border Trilogy*) の第二作『越境』(*The Crossing*, 1994) において主人公ビリー・パーハムが経験するイニシエーションの意味を「狼」のシンボリズム、「剥き出しの生」、高慢の罪、証人の責務といったモチーフに着目しながら考察した。物語冒頭に置かれた牝狼譚におけるビリーの行動様式からは、彼がエコロジストとして狼猟を行うという博物学者アーネスト・トンブソン・シートンが抱えたパラドクスを継承する人物であり、アメリカの例外主義や超絶主義に依拠する自然観をもつ人物であることが分かる。牝狼を「崇高なるもの」として神秘化し、自然との同一化を志向するビリーの欲望はアメリカ人の集合的な欲望を代表するものなのだ。しかし、捕えた牝狼を故郷に返還するためにメキシコ側に越境する段に至り、彼の「崇高な」企図は「高慢な」企図へとその意味合いを変えてしまう。物語において、皮肉な形で牝狼と同一視される（「狼人間」となる）ビリーは、哲学者ジョルジョ・アガンベンのいう「殺害可能だが犠牲化不可能な生」を生かされる存在となる。当初の目的が果たせず、牝狼をみずから手で銃殺しアメリカに帰還したビリーの姿が、「人間の法からも神の法からも外に置かれている」ために羨望と憎悪という相反感情を人々に誘発することはその証左である。イノセンスの世界から切断されたビリーの企図はキリスト教的な意味での「高慢」の罪と等価となるが、それゆえに『越境』の後半は「父」なき世界においてビリーが罪の報いを受ける物語として結実していく。物語内物語として設定された「神自身にとっての不利な証人」＝「相手にとって不足のない敵」であることを目指した隠者の物語が示しているのは、ビリーが物語内世界において証人たることの責務を果てしなく負わされるという事態である。ビリーは幾多の人々の物語にひたすら耳を傾けるが、彼がそれらの物語から何を学ぶのか、旅路の果てに成長したのかは不明である。むしろそのようなイニシエーションにまつわる問いを無効にってしまうほど、ビリーに背負わされた世界の証人たることの責務は根源的かつ普遍的なものとして示されているのだ。

キーワード: コーマック・マッカーシー, 『国境三部作』, 剥き出しの生, ホモ・サケル, 証人, イニシエーション

#### はじめに

コーマック・マッカーシー (Cormac McCarthy, 1933-) の『国境三部作』(*The Border Trilogy*) の第二作『越境』(*The Crossing*, 1994) において、主人公ビリー・パーハムはアメリカとメキシコ国境を三度往復する。一度目はアメリカ側で捕らえた牝狼をメキ

シコ側に連れ戻すための旅、二度目は両親を殺害した犯人と盗まれた馬の跡を追うための旅、三度目は弟ボイド (の遺骨) を探すための旅だ。三度の旅はロード・ナラティヴ的な直線性と神話的な円環性をあわせもつという点で共通している。

越境はマッカーシー作品において何度も繰り返される主題である。だが、たとえば『すべての美しい馬』

\* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

(*All the Pretty Horses*, 1991) においてカウボーイの生活を続けることが適わなくなったジョン・グレイディの旅がある種の必然性を持っていた(カウボーイの理想郷をもとめての越境)のに対し、『越境』におけるビリーの旅、とりわけ一度目の越境は強烈な啓示体験という側面を持つという点で特異である。それは一度、境界線を踏み越えてしまえば何度も越境を繰り返すという回帰性(何度も新しい人間に生まれ変わる)を特徴とする一方で、越境したことをなかつたことすることはできない(元の人間には後戻りできない)という不可逆性によって規定されている。この越境の両義性は、物語冒頭で描かれているビリーの原始体験が深く関係している。すなわち、1931年当時6歳の彼が、メキシコからアメリカ側(ニューメキシコ州ヒダルゴ郡)に越境してきた狼の群れが舞踏のように羚羊を狩る幻想的な光景を目の当たりにした体験である(迷い込んできた牝狼の存在は例外として、野生の狼の姿をビリーが目撃するのはこの時が最初で最後である)。<sup>1</sup> 端的にいつてしまえば、『越境』の構成および物語内容の核を担っている神話的円環性=回帰性とビルドゥングスロマン的直線性=不可逆性は、いずれも物語冒頭の狼譚によって準備され、下支えされているのだ。本稿では『越境』の狼譚の意義をあきらかにしながら、ビリーのイニシエーションの意味を「狼」のシンボリズム、「剥き出しの生」、高慢の罪、証人の責務といったモチーフに着目しながら考察する。

### 1. シートンのパラドクスと「狼」のロマンティシズム

狼と人間の関わりには長く多様な歴史がある。先史時代、人間と狼は獲物や領地をめぐる争う好敵手同志であった。たとえば、フランスのドルドーニュ県に残るラスコーの壁画(紀元前13,000年頃)には、狩猟の民であった人間と生存環境を共にする狼との競争関係が象徴的に描かれている(Lopez 88)。時代を下り、中世ヨーロッパにおいては、「狼」は基本的に悪の象徴とみなされていた。魔女裁判よろしく「狼人間」として多くの人間が処刑されたように、キリスト教会が民衆を統御するために「狼」の不吉なイメージを利用したことはその範例である(Lopez 208)。近代農業・牧畜が発展すると、牛や羊などの家畜を襲う狼は人間の生活領域から徹底的に排除されるようになった。北アメリカ大陸においては、はやくも18世紀初頭にWilliam Penn (1644-1718)が植民地政府による狼狩りへの報奨金制度を創設しているし(Robisch 289)、19世紀の開拓時代には、西部や南西部への移住者た

ちのために狼の根絶計画が各地で実行されている。やがて狼猟はアメリカ白人の文化として根づき、報奨金目当ての狼猟師(wolf trapper)のなかからは伝説的な人物も生まれた。Wallis R. Sanbornが指摘するように、北アメリカにおける狼の消滅の直接要因は西漸運動や資本主義の隆盛に求められるだろうが、その歴史的・精神的背景として「狼嫌悪(lobo-phobia)」の文化が存在するのである(134)。<sup>2</sup>

他方、「狼」が神秘化・神話化されてきた事象は世界各地で数多い。このことが示しているのは、生死を賭けた絶え間なき争いの世界において、秀逸な狩人としてたくましく生き残ってきた狼に対する人間側の畏怖や崇敬の念である。<sup>3</sup> 『越境』の舞台であるアメリカ南西部においても、家畜を襲う害獣として狼は駆逐され消滅していく一方で、特定の狼の物語は語り継がれ伝説化していった。<sup>4</sup> 博物学者アーネスト・トンプソン・シートン(Ernest Thompson Seton, 1860-1946)の『私の知る野生動物たち』(*Wild Animals I have known*, 1898)に収められた『カランポーの狼王ロボ』(*Lobo: The King of Currumpaw*, 1896)は、その代表的なものであろう。この書のなかでシートンは、アメリカ東部の実業家である友人が所有するニューメキシコ州の大牧場から狼を駆逐する仕事を引き受けた際の経験をもとに、人間側の浅はかな知恵を凌駕し、迫害に屈することない自然界の英雄としてロボという個体としての狼を神秘化している。<sup>5</sup>

もっとも『カランポーの狼王ロボ』は、狼猟師たちを一蹴するロボの知性、相方の牝狼ブランカが人間に捕まったときに見せた彼の情、その情を人間につかれ、捕まってもなお誇りを失わない気高さ、あるいはありのままの自然と一員として生きることの素晴らしさなどが美談化されているだけの子供向けの物語ではない。この物語を「文学」として読むときに注意しなければならないのは、ロボとの関わりを通してシートンが経験したエコロジー的転回ともいべき回心の記録が綴られていることだ。事実、すべての動物の生きる権利を唱道する一方、狼猟師としてニューメキシコに赴くという彼の行動は論理的には破綻しているが、物語で前景化されているのはそのようなシートン自身の抱える自己矛盾についての意識のあり方に他ならない。シートンは「ロボを退治する『やとわれオオカミ猟師』という仕事を引き受けること」に矛盾を感じつつ、「都会にすみ野生動物に手をくたさない人も、同じ矛盾に生きているのであり、自分はその矛盾をせおって、オオカミを知る義務がある」(今泉 26)と考えることによって、自己矛盾を乗り越えようとしたの

である。

このシートンのパラドクスの内実を理解することは、『越境』の牝狼譚におけるビリーの言動を理解するうえでも重要である。『越境』の牝狼譚ではビリーが経験するエコロジ的転回が唱道されていると考えるのは極端な見方であろうが、Dianne C. Luce が詳細に論じているように、たしかにビリーはエコロジストとして狼獵を行うというシートンのパラドクスをある程度継承しているようにみえるし、牝狼譚はシートンによるロボの物語（およびそれから影響を受けた Leopold）に代表される文学的伝統のなかにあるとみなすことができる（Seton's experience with Lobo contributed to his repudiation of his old way of relating to animals. Billy's decisions and strategies for saving the she-wolf thus place him in the literary tradition of at least two wolfkillers who repudiated their acts and wrote to encourage others in a more enlightened ecological vision [Luce 183]）。

シートンは『シートン動物記』のまえがきで「ここに書かれている物語は本当のことだからこそみな悲劇的なのです。すべての動物は悲劇的な死を迎えるものです（The fact that these stories are true is the reason why all are tragic. The life of a wild animal *always has a tragic end* [12; italics original]）と述べているが、端的にいえば、自身の狼獵の大義を死の美学と結びつけることによって解消しようとしたわけである。マッカーシーの描く生物学的決定論が支配する世界ではすべての存在は「消えゆく（vanish）」存在として描かれ、往々にして「悲劇的な死を迎える」。<sup>6</sup>なかでも「狼」は「消えゆく世界のコア・イメージ（the core image of the vanishing world）」（Luce 168）であり、極度に美学化される（「狼を知ることはできない・・・畏にかかった狼は歯と毛皮だけにすぎない。狼それ自体を知ることはできない・・・狼は偉大なる秩序に属している存在である・・・狼はこの世界とおなじようなやり方でつくられている。世界に触ることはできない（El lobo es una cosa incognoscible ... Lo que se tiene en la trampa no es mas que dientes y forro. El lobo propio no se puede conocer. ... [T] he wolf is a being of great order ... The wolf is made the way the world is made. You cannot touch the world [45]）」。

ビリーはそのように牝狼を獲得不可能な「崇高なるもの（sublime）」と見なすことで自身のシートンの矛盾を乗り越えようとする。ビリーの幼少期における狼の群れの目撃体験は以下のように描かれる。

They were running on the plain harrying the antelope and the antelope moved like phantoms in the snow and circled and wheeled and the dry powder blew about them in the cold moonlight and their breath smoked palely in the cold as if they burned with some inner fire and the wolves twisted and turned and leapt in a silence such that they seemed of another world entire. ... They were seven of them and they passed within twenty feet of where he lay. He could see their breath. He could feel the presence of their knowing that was electric in the air. ... When he got back to the house Boyd was awake but he didnt tell him where he'd been nor what he'd seen. He never told anybody. (45)

「崇高なるもの」の原始体験が描かれているこの場面では、それを獲得しようとするビリーの無謀で不遜な冒険が予兆されている。実際に、ビリーの「崇高なるもの」を志向する無意識の欲望はあまりに強烈で根源的であるからこそ、彼は狼体験を弟ボイドにも打ち明けることのできない秘め事とする。「崇高なるもの」それ自体との対峙は、媒介者抜き、個人の宿命の出来事とせねばならないというわけだ。この独我論的思考はすぐれてアメリカ小説的な欲望であり、牝狼にはメルヴィルの『白鯨』の白鯨やフォークナーの「熊」における熊のような壮大な象徴性・神秘性が与えられているのだ。

ビリーの欲望は文明の病ともいえるほど強烈な近代人の欲望でもある。それは「自然」を所有・支配したいという欲望、究極的には「自然」と同一化したいという身も焦がれるほどのロマンティシズムに転化していくものだ。事実、牝狼の扱いに関して何の計画もなかったビリーは格闘の末に牝狼を捕獲すると、カウボーイたちに撃ち殺される前に家に連れ帰りたいという心境になり（59）、最終的には、牝狼を取り返すために闘技場に乱入し「これは俺のものだ（Es mía [117]）」と言い放つまでになる。

語り手はそのような膨張するロマンティシズムをボーダーランドの荒野にまつわる心象風景と密接に結びつける（He closed his eyes and tried to see her. Her and others of her kind, wolves and ghosts of wolves running in the whiteness of that high world as perfect to their use as if their counsel had been sought in the devising of it [31]）。その心象風景のなかで牝狼は人間＝文明側の欲望や願望の鏡となる。

たとえば、牝狼譚の語り手は、罨にかかってしまったつがいの牡狼の傍らから牝狼が離れようとしなかったこと、仲間欲しさに牝狼が生まれた土地を移動したことなどをロマンティックに語る (24-25)。<sup>7</sup> また、野生の獲物たちを食らうときは異なる方法で家畜である牛を牝狼は襲うが、その過激な襲い方は、人間社会 = 文明に飼い慣らされ、屠殺されることを知りつつも抵抗の姿勢を微塵たりとも見せない牛たちへの怒りに駆り立てられているのであり、牛たちが「古の秩序、古の儀式、古の掟 ([O] ld order. Old ceremonies. Old protocols)」を踏みにじったためだと説明される (25)。さらに、牝狼を標的とする罨は「妖怪 (trolls)」 (36) のようだと表現されるように、語り手 (あるいは作者) は狼 = 消えゆく者への共感を強調しているのだ。

この文脈において、批評家の John Cant はアメリカの例外主義 (Exceptionalism) と超絶主義 (Transcendentalism) に依拠する「自然」観に結びつけてビリーが「狼」に魅せられる理由を説明している (Billy's fascination with the wolves lies in his sense that they apprehend the world directly. He attempts to emulate this ability, to gain the wolf's direct sensory apprehension of the world, an experience unmediated by a cultural matrix and needing no structuring narrative [210])。Cant にしたがえば、「世界をじかに感得する力」をもち、「いっさいの物語枠を必要としない」個人が、あらゆる社会的・文化的枠組みを超える第一審級とみなされる。つまり、「世界」や「自然」と媒介者なしにつながり、認識したいという欲望をもつからこそ、ビリーは自分が牝狼を「捕まえようとしていること」を秘密裏にしなければならないのだし、実際に牝狼を捕獲すると、父親との約束を反故にし、国境を越えメキシコの山地に牝狼を連れ返そうという衝動に我知らずしたがうことになるのだ。牝狼は大農園主から預ったものだから売ることはいできないというビリーの嘘 (90) は、狼の返還を神託ととらえる彼の自意識の表明と解釈することも可能だろう。また、これは Ihab Hassan が「自由解放へのラディカルな衝動を抑えることのできない [アメリカの] 原初の自己 (an aboriginal Self the radical imperatives of whose freedoms cannot be stifled [6])」と定義した無垢なる行為 (イノセンス) ともいえるだろう。実際に、このように牝狼とビリーの関係性をみると、物語序盤でなぜビリーが未知のインディアンに食糧を与えるのか、また、なぜビリーは闘技場で陵辱された牝狼を自ら銃殺するのか、という牝狼譚における重要な

問いに対してもひとつの答えが導き出されるように思える。

したがってというべきか、牝狼 = 崇高なるものへの欲望がビリーの個の欲望であると同時にアメリカ人の集合的な欲望として表象されていることは偶然ではない。「生きたままの狼を見たい (I'd like to see her alive)」 (34) というボイドの言はあえて指摘するには当たらないだろう。捕らえた牝狼を家に連れ帰ろうと試みるビリーを近所のトラック運転手は狂人扱いするが、心の奥底ではビリーの無鉄砲な行動を称賛していることは明白だ (58-62)。国境沿いに住む、ビリーの父親を知る家族は、ビリーの父親に連絡を入れるどころか、負傷した牝狼に応急処置を施し、ビリーのメキシコ行きを支援する。要するに、彼らは皆、ビリーの欲望を共有し、「牝狼 = 崇高なるもの」に魅了されているのだ。かくして、牝狼譚におけるビリーの企ては、「神の御業と人間の行いがひとつになる場所」 (46) をめざすアメリカという共同体の聖なる儀式となる。

## 2. 自然の無関心と狼 (人間) = ホモ・サケルの身体

だが、そのようなビリーの「崇高な」企図は、メキシコ側に越境すると「高慢な」企図へと意味合いを変える。ピラーレス山脈に向かう道中、禁制品として牝狼を没収されたビリーは、ある農園で見世物として獰猛な犬たちと闘う牝狼を取り返そうとし闘技場に乱入する。それを見た農園主の息子は「お前はこの国のことを勝手に入ってきて何をしてもいい国だと思っているんだらう (You think that this country is some country you can come here and do what you like [119])」とビリーの行為を非難するが、それに対してビリーは「そんなことは思っていない。この国がどんな国かだなんて考えたことすらない。・・・俺たちはただ通り過ぎていきたいだけだ (I never thought that. I never thought about this country one way or the other. ... We was just passin through [119])」と応答する。次節で検討するように、このビリーの応答の仕方にはキリスト教教義でいう「高慢」の罪が刻印されていると考えられるだろう。「通り過ぎるというより、侵入しているのだらう (Pasar o traspasar)」と農園主の息子がビリーの言を糾弾するように、闘技場にいるメキシコ人たち全員にとって、ビリーは牝狼と同様に越えてはいけな境界を越えてやってきた「侵入者 (intruder [117])」にすぎないのだ——「ビリーはいくつもの顔のなかに自分の訴えをきいてくれそうな顔をさがしたが無駄だった ([Billy] looked

among the faces for any there to whom he might plead his case but he saw nothing [119] )」。事実、狼は境界(国境)のことなど何も知らないというビリーの申し立ては、狼が知ろうが知るまいが境界(国境)は狼の立場に関係なく存在し、国境を越えてやってきたのなら狼の立場はいつそう悪くなるはずであり、ビリーの立場も狼と同じだという農園主の息子の論理によっていともたやすく論駁される(119)。

この場面において皮肉な形でビリーは牝狼＝「自然」と同一視されることになるわけだが、ここには幾ばくのロマンティズムも介在しない。そもそも『越境』でマッカーシーが描く「自然」はビリーの企てに対して理解を示すような恵み深き存在ではない。「使用の目的も考えない軽率な神の手から生まれた(born out of the hand of some improvident god who'd perhaps not even puzzled out a use for them [31])」といった形容句や、「世界には死がもたらす秩序以外の秩序はない(there is no order in the world save that which death has put there [45])」といった表現からもあきらかなように、マッカーシーの「自然」(往々にして「荒野」と等価である)は「文明」の対極に布置される無垢なる存在ではないし、Frederic Jackson Turner 的な意味でアメリカ「文明」と表裏一体の関係にある存在でもない(Luce 182を参照)。それは脱神秘化された自然、いってみれば、脱「自然」化した存在であり、人間の思いや期待に徹底的に無関心な外部である。自然は人間の内にあるのではなく、人間の内面の投影でもないというわけだ。

マッカーシーの小説においては、文明のなかに悪が存在するのと同程度に自然のなかに悪が存在する。あるいは、文明も自然も包摂する「世界」の本質のなかに純粹悪が含まれている。「世界」が人間の前に現れるのではなく、人間の方が「世界」を通りすぎる存在にすぎないという脱人間中心的思考はマッカーシーの小説では支配的であるが、これは人間や何かの属性として悪が存在するのではなく、悪そのものが存在するという思考の裏返しとなっている。<sup>8</sup>簡単にいってしまえば、すべての人間存在は非本質主義的に捉えられているわけだが、代表的なアメリカ小説においてしばしば「自然」と同一視され、ロマンティックに描かれるネイティヴ・アメリカンの描写も例外ではない。マッカーシーの小説では、ネイティヴ・アメリカンは白人入植者たちとくらべて罪深いでもなければ無垢でもない。物語冒頭でビリーが両親に内緒で食料を与えたネイティヴ・アメリカンの男が、両親殺害の犯人なのかどうか曖昧に描かれていることは顕著な例であろう。<sup>9</sup>

自然や世界の人間に対する無関心あるいは独立性という文脈において、牝狼の身体が克明に描写されていることは注目し値するだろう。「闘技場にただ一匹でいる狼は見るも無惨な姿をしていた。・・・頭を土に寝かせ舌をだらりと土につけ毛衣は土と血にまみれ黄色い目は何も見ていなかった([T]he wolf was alone in the pit and she was a sorry thing to see... [H]er head lay in the dirt and her tongue lolled in the dirt and her fur was matted with dirt and blood and the yellow eyes looked at nothing at all[121-22])。このような徹底的に虐げられた牝狼の身体描写は、Giorgio Agamben のいう「殺害可能だが犠牲化不可能な生」＝「ホモ・サケル」を想起させる。闘技場で牝狼の身体に加えられる暴力は「誰もが罪を犯さずにおこなうことのできる殺害」であり、「供犠の執行とも・・・処刑とも冒涇とも定義づけることができない」(『ホモ・サケル』119)種類の暴力に他ならないからだ。

アガンベンは「古代ローマにあっては不可能と見なされていること——追放に処せられた者を裁きなしに法の外で殺害すること——は、古代ゲルマニアでは反論の余地のない現実だった」というRudolf von Jheringの言を引き、古代ゲルマン法を基礎づけていた「平和という概念と、これに対応する悪人の共同体からの排除」の仕組みに着目する。共同体から締め出された者は「平和なき者」となり、「誰もが殺人罪を犯さず彼を殺害できた」が、この殺害可能となった者＝ホモ・サケルは「狼人間(loup garou)」と定義されもしたという。中世でも例えばエドワード証聖王の法(1130-35年)は、「締め出された者をwulfeshead(文字通りには狼頭の意)と定義し、これと同じものとしている(彼は追放の日から狼の頭をかぶる)」のだ(149)。<sup>10</sup>

『越境』の牝狼譚において牝狼が一定程度人格化されていることは偶然ではない。アガンベンは「集団的無意識において、森と都市のあいだで分割された半人半獣の雑種の怪物としてとどまっていたにちがいないもの——狼[人間]——はもともと、共同体から締め出された者の形象なのである。・・・締め出された者の生は、動物と人間、ピュシスとノモス、排除と包含のあいだの不分明の境界線、一方から他方へと移行する境界線なのだ。人間でも野獣でもない「狼人間」はまさしく、その二つの世界のいずれにも属することなく、とはいえ逆説的に両方の世界に住みついている」(150)と述べているが、『越境』における牝狼の表象はこの「狼人間」に限りなく近いことがわかる。事実、ビリーによって息の根を止められる前の牝狼は害

獣として処理されるわけでも、共同体の浄化のための犠牲として殺害されるわけでもなく、あくまで殺害可能な状態にとどまっていた。つまり、牝狼はあくまで「執行と殺人罪のあいだの不分明地帯」に捉えられた「聖なる生、すなわち殺害可能だが犠牲化不可能な生」(120)を生かされていたのである。<sup>11</sup>

闘犬たちに痛めつけられ続ける牝狼の身体はこの「殺害可能だが犠牲化不可能な生」の究極の具現といえるが、そのような存在をビリーは自らの手で葬ることになる。<sup>12</sup>彼の牝狼の理想化はあまりに激烈なため、牝狼が儀礼的浄化のための生贄とされるのではなく、あからさまに「殺害可能だが犠牲化不可能な生」を生かされていることを宗教的冒瀆として捉えているかのようでもある。だからこそ、狼の死骸をその何十倍もの値がつくウィンチェスター銃と交換し(124)、道中、自分自身の血と同じ味がする牝狼の血を味わい(125)、かの地では聖なる供犠を行うように牝狼を埋葬することになるのだ(126)。

捕まった狼はもはや狼ではないという言葉(47)を裏書きするように、ピラーレス山脈に埋葬された牝狼はその身体性が剥奪されることで「崇高なるもの」として完成する。

[Billy] reached to hold what cannot be held, what already ran among the mountains at once terrible and of a great beauty, like flowers that feed on flesh. What blood and bone are made of but can themselves not make on any alter nor by any wound of war. What we may well believe has power to cut and shape and hollow out the dark form of the world surely if wind can, if rain can. But which cannot be held never be held and is no flower but is swift and a huntress and the wind itself is in terror of it and the world cannot lose it. (127)

そのように、ビリーの一連の行為は象徴的な意味で牝狼を「殺害可能だが犠牲化不可能な生」から「崇高なるもの」へ昇華する行為と捉えることができるのだが、皮肉なことに、彼自身は逆にその圏域内に強固に囚われいく。つまり、牝狼が「崇高なるもの」の圏域に移行するのと対称的に彼自身は「狼人間」化＝ホモ・サケル化していくのだ。アメリカに帰還してきたビリーの姿＝身体を見た人々が彼に向ける不穏な視線はそれを端的に示している。

[P]eople passing in the street turned to look at [Billy]. Something in off the wild mesas, something out of the past. Ragged, dirty, hungry in eye and belly. Totally unspoken for. In that outlandish figure they beheld what they envied most and what they most reviled. If their hearts went out to him it was yet true that for very small cause they might also have killed him. (170)

前節で述べたようなアメリカ性を携えず、荒野のメサからやってきたとも過去からやってきたとも判別できないビリーの身体のみすぼらしさに対面し、人々は魅せられると同時に殺したいという相反感情に引き裂かれる。Michel Foucaultを引用しながらアガンベンは、「『身体』という概念も、性やセクシュアリティといった概念と同じく、すでに〔権力〕装置の内に捉えられている。・・・それはつねにすでに生政治的身体であるとともに剥き出しの生」であるとし、「生政治的身体(ホモ・サケルの生はこの最終的な化身)はその極端な形式において、法権利と事実、規範と生物学的生の絶対的な不分明の境界線という姿を呈している」と指摘している(254)。境界(国境)という権力装置の「不分明地帯」に置かれた「狼人間」としてのビリーの身体は現在進行形の「剥き出しの生」に他ならない。しかし同時にそれは「人間の法からも神の法からも外に置かれている」(106)という点で「限界概念」(107)を具現するものであり、だからこそ、こういってよければある種の特権的存在として立ち現れているのであり、そのようなビリーに対して、人々は羨望と憎悪という相反感情を抱いてしまうと考えられる。対照的に、ビリーがメキシコへの三回目の旅から持ち帰るボイドの死骸、つまりもはや「剥き出しの生」ではなくなった身体は何の留保もなく追いはぎの集団に暴かれ、馬に踏みつぶされることになるがこの場面の意味も同じ文脈で理解できるだろう。

### 3. 高慢の罪と証人の責務

牝狼譚におけるビリーの狼人間化＝ホモ・サケル化という主題は、彼のイノセンス喪失というストーリーと同調している。ピラーレス山脈への牝狼の返還と埋葬＝「呪われた企て(DOOMED ENTERPRISES [119])」の過程でビリーはそれまでのイノセントな世界から決定的に切断される。「呪われた企ては人生を永遠に過去と現在に分かつ。・・・彼はもうすでにそうではなくなってしまった子供に再びなりたいたいと考え

た (DOOMED ENTERPRISES divide lives forever into the then and the now. . . . He thought to become again the child he never was [119])。イノセンスの喪失はアメリカ小説ではおなじみの主題だが、『越境』では「崇高なるもの」を志向する企てがキリスト教的な意味での「高慢」の罪と等価とされ、ピリーがその報いを受けるストーリーとして結実しているのだ。

「高慢」とは「他人に対するふるまいばかりでなく、自己の不当な卓越性に心を奪われて神を忘れ、また神のごとくならうとして神に帰すべき栄光を自分に帰する内的態度」(浜口 852)である。聖書によれば、人間の「高慢」の最たるものは「神と等しくあろうとするアダムの姿にみられ」、歴史的には「神によって与えられた真の秩序を軽視して、本来あるべき人間の在り方に背くこと」、「七つの罪源の第一のもの」などと見なされてきた。「高慢」は「神と人間とのあるべき関係を破壊する道徳的・宗教的な悪徳」なのである(浜口 852-53)。ピラーレス山脈の麓で、牝狼の亡骸の傍らで「悔悛者 (penitent)」のように眠るピリーは自らの罪を無意識のうちに悟っているように映る。

ピリーの受ける「高慢」の罪の代償とは端的にいえば両親の殺害であり、結果的に自身が孤児になる事態である。Robisch はピリーが牝狼を捕らえた日が彼の両親が殺害された日と同日であることを指摘しつつ、マッカーシー作品においては狩猟という行為が神秘化される傾向にあることをあきらかにしているが(292)、なるほど、牝狼譚においてピリーが牝狼を捕え、銃殺するまでの過程は彼が孤児化する儀式の裏返しとして捉えることができる。『ハックルベリー・フィンの冒険』をはじめアメリカ小説では孤児(化)の主題は自己信頼や個人主義の文脈で肯定的に捉えられることが多いといえるが、マッカーシーの小説ではギリシア悲劇のような構図のなかで、あるいは仏教でいう業(因果応報によってひとつの善悪の行為は必ずその結果を生む)のような世界観によって捉えられているというべきだろう。

すでに述べたように、ピリーは牝狼の死骸と交換に父の銃を差し出すが、ピリーがこの銃を勝手に持ち出したことが両親が抵抗もできず殺害されてしまった要因であること(167)は重要だ。また、因果応報の世界において、「父」の消失という主題が孤児化の主題に重ねあわされることは物語的必然ともいえる。没収された牝狼を追跡する過程でピリーは、冷気と暗闇と沈黙が押し迫ってくる砂漠をさまよい歩く父の夢を見(112)、牝狼を埋葬した後のピリーは父親の顔が思い

浮かばなくなっている(135)。「父」の消失とは本人が知るすべもないまま文字通り孤児になっている事態を暗示すると同時に、象徴的な意味において、因果応報としての「神」「世界」「秩序」からの隔絶をあらわすのだ。ピリーを孤児だと決めつけ、たとえ孤児であっても放浪はやめて世界のどこかに自分の場所を見つけるべきだと警告するインディオの老人の言葉は、人間一般の存在のあり方を比喩的 (figurative) に述べたものであると同時に、事実をそのまま語る (literal) ものものである。事実、「こんな風に放浪していると放浪が完全に身につけてしまっただけで他の人間から疎遠になってしまい、やがては自分自身からも疎遠になってしまう ([T]o wander in this way would become for him a passion and by this passion he would become estranged from men and so ultimately from himself [134]) という彼の言葉は、現実に対してほとんど不感症となり、世界から隔絶されるピリーの行く末を暗示している。<sup>13</sup>

このように考えてくると、崩壊しつつある教会=神の家に住み、神との境界争いを企てた隠者の話は、牝狼譚におけるピリー自身の行為をめぐる寓話と見なすことができるだろう。この隠者の話はこの崩壊しつつある教会で暮らす元司祭によって語られる。元司祭によると、神の摂理によって不本意に大災害を生き延び、先祖からも子孫からも切り離された隠者は神を弾劾するために聖書を丹念に読み、自ら創造したものを破壊する神の暗い性質を見出そうとしていたという(153)。隠者の神に対決する姿勢と、無限定の神を盲目的に信仰することで神を制御しやすいものにしようとしていた(151)元司祭の姿勢は根本的に対立していた。元司祭は話を聞くピリーに対し、世界の境界線は神が定めたものなのに、神と論争し境界線を定めなおし、その境界線が守られることを望む隠者は狂人だったのか、聖者だったのか(151)という問いを投げかけるが、この問いこそが実は牝狼を(少なくとも自身にとって)聖域に返還しようとしたピリーの行為を理解するための参照枠となっているのだ。

隠者と神学的論争を行った(そして打ち負かされた)元司祭によれば、隠者は「行為は証人がいてこそ存在する。証人がいなければ誰がそれを語りうるのか。…行為は無に等しく証人こそがすべて (Acts have their being in the witness. Without him who can speak of it? . . . [T]he act is nothing, the witness all)」, 「神は証人を持たない ([F]or God there could be no witness)」がゆえに自分の存在を明示できないという恐ろしい悲劇のなかにいると考え、自分が生かされて

いるのは「神自身にとっての不利な証人 (a witness against Himself)」として立つためであり、自分は「相手にとって不足のない敵 (the worthy adversary)」として神によって選ばれているのだという考えに至ったという (153-54)。隠者はやがて、神の恐ろしさは想像を絶するもので、神のことは避けることも考えないことも限定することもできず、自分の異端的な思想も含めて神はすべてを内に含むということを悟り、死んでいった (157)。ここで重要なのは、隠者が神との境界争いに敗れ死んでいったという事実ではなく、隠者の不遜な企図こそが「崇高なるもの」を志向したビリーのロマンティックな欲望の果てに位置するものとして定位されていることだろう。

したがって、隠者の生涯を語る元司祭の語りは、牝狼譚におけるビリーの過去の行為を審判する参照枠になるにとどまらず、ビリーのその後の物語での役割を予見するものとなっている。隠者の死後、その人生の証人となった元司祭は、境界のない神は証人を必要としないという認識に到達する。

What the priest saw at last was that the lesson of a life can never be its own. Only the witness has power to take its measure. It is lived for the other only. The priest therefore saw what the anchorite could not. The God needs no witness. Neither to Himself nor against. The truth is rather that if there were no God then there could be no witness for there could be no identity to the world but only each man's opinion of it. The priest saw that there is no man who is elect because there is no man who is not. To God every man is a heretic. . . . In the end we shall all of us be only what we have made of God. For nothing is real save his grace. (158)

ひとつの人生はそれ自体では意味はなく、証人がいてこそはじめて存在するが、境界のない神のみは証人を必要としないという元司祭の得た認識は、証人こそがすべてで (神がつくった) 世界についての証言が増えるにつれて世界は無と化す (154) という隠者の認識を修正するものだが、証人の性質をめぐるこの認識こそが牝狼譚だけでなく、ビリーを主人公とする『越境』という物語の全体像に対するひとつの視角を提示しているのだ。

要するにこういうことだ。牝狼はビリーの証人として存在したわけではない。牝狼の目は常に「世界」を

見ていたのであり、ビリーを見ていたわけでない。「狼の目とそれが証人となっている世界 (those eyes and the nation to which they stood witness [74])」はもとよりビリーに無関心であった。そこで示されていたのは、ビリーもまた「世界」について牝狼のかわりに証言することはできないという身も蓋もない事実であり、牝狼と「世界」の関係を語ることの不可能性であったのだ。

他方、『越境』という物語の残余として示されているのは、ビリーが結局のところ隠者と同様の人生を送る (そして失望のうちにこの世を去る) という筋書きではない。そうではなく、元司祭が隠者の人生の証人であるように、ビリーは元司祭から隠者の話を聞くことにより、隠者の物語の証人、さらには元司祭の物語の証人となるということである。それもビリー自身が証人としての立場を自ら選びとるというよりも、彼が我知らず証人としての責務を果てしなく負わされるということである。

実際のところ、『越境』における牝狼譚以降の物語において、ビリーは幾多の人々の話にひたすら耳を傾け、彼らの物語の証人になり続ける。つまり、ビリーの成長物語という性質は希薄化し、彼が証人として生き続ける証言についての物語というメタ物語的性質を色濃く帯びていく。<sup>14</sup> ビリーが人々の物語から何を学ぶのか、旅路の果てにビリーは成長したのか、しなかったのか、そのような問いを無効にしてしまうほど、ビリーに背負わされた証人としての役割と責務は根源的で普遍的なものとして示されているのだ。

#### おわりに

このように『越境』の牝狼譚をいくつかの角度からみてみると、牝狼に「崇高なるもの」を重ね合わせていた理想主義的なビリーが、牝狼のあるいは自身の「剥きだしの生」を実感し、やがては永遠の証人に変貌していく『越境』という物語全体の、あるいは『国境三部作』全体の底辺に横たわる物語構造が見えてくる。これをビリーのイニシエーションの基礎構造とみなすことも、物語のモードとしてのロマンティズムからリアリズムへの変化とみなすことも可能だろう。もっとも、マッカーシーは、ロマンティズムを放棄し、冷徹なりアリズムに生きていくビリーの生のあり方を肯定するでも否定するでもなくただ淡々と描いていく。アガンベンはアウシュビッツについての論考のなかで「証言にたいする終わりのない注釈」として、「証言にはその本質的な部分として欠落がともなっているとい



うこと、すなわち、生き残って証言する者たちは証言しえないものについて証言しているのだということがある時点で明らかとなったので、かれらの証言について注釈することは、必然的に、その欠落について問うことを意味するようになった。あるいはむしろ、その欠落に耳を傾けようとすることを意味するようになった」（『アウシュヴィッツの残りのもの』10）と述べているが、あたかも物語世界全体についての証人となるビリーもまた、何かが決定的に欠落していることを承知で耳を傾け続け、それを物語ることの不可能性について語り続けるというパラドクスを生きていく覚悟を最後に（無意識に）身につけたようにも映る（『越境』においてメキシコの民衆の歌コリドはまさにそのような性質をもつものとして表象されている）。事実、ビリーは『国境三部作』の第3作『平原の町』の終わりに描かれているように、ほとんどすべての登場人物よりも生きながらえ、世紀をまたいだ21世紀の物語現在ではカウボーイのパロディ、あるいは自分自身のパロディであるかのように西部劇映画にエクストラとして出演するほどだ。そして読者はある種の倫理的態度をそこに見出さなければならぬだろう。まさに永遠の証人としての役割を担わされたビリーの証人となるのは、ビリーの物語の読者個人をおいてほかには存在しえないからである。

## 注

本稿は科研費、基礎研究（C）「ボーダーランド表象の複合的編成—コーマック・マッカーシーの作品を中心に」（課題番号 25370272）の助成を受けたものである。

1. 『越境』の物語現在の起点は1941年（ビリー16歳の年）である。記録によれば1930年代にはアメリカ南西部から狼は一掃されている（Robisch 288）。
2. David E. Brownは「狼は実行可能なあらゆる方法で殺された。毛皮目的でも娯楽目的でもなく、単純に『駆除された』のである（Wolves were killed by any means feasible, not for fur or sport, but simply to “clean them out” [32]）」とアメリカ南西部における状況を記している。他方、1934年から40年の間、メキシコでは大牧場の土地が小作農に割譲されたことや経済状況が悪化したことで、それまで牧場を経営していたアメリカ人（gringos）や狼猟師がメキシコを去り、国境付近の狼の数は一時的に増加したという（101）。アメリカ南西部の土地の裸地化の要因をカウボーイによる狼の駆逐に帰する論者もいる（Coates 246を参

照）。ちなみにマッカーシーは急進的環境論者でもあった作家 Edward Abbey（1927-89）とアリゾナ州南部への狼の再導入を半ば本気で計画していた（Woodward 30）。

3. とりわけ、アメリカ先住民族の文化においてはこの傾向が顕著である。たとえば Barry Lopez は以下のように記している。「アメリカ先住民族はたいてい、猟師としての狼の有能さ、とりわけ、獲物を逃さない能力、その持久力、大地をなめらかに音もたてずに駆け抜けるその移動の流儀に敬意を払っていた。先住民たちは狼の吠え声に心動かされたが、その吠え声はときに霊界と交信しているものとみなされた。・・・神の御言葉を託された者、死者と対話する者として狼を考えることは古くからあった（[M]ost Indians respected the wolf's prowess as a hunter, especially his ability to always secure game, his stamina, the way he moved smoothly and silently across the landscape. They were moved by his howling, which they sometimes regarded as talking with the spirit world. ... The wolf as oracle, as interlocutor with the dead, is an old idea [102-103]）」
4. Robisch はロボを含め、伝説化した狼の名前を列挙しつつ、子供向けの本からカレンダー写真に至るまで、否定的にも肯定的にも狼の神秘化は続いていると指摘している（288）。
5. 『越境』における牝狼の描写は一定程度、シートン、さらにはジャック・ロンドン（Jack London, 1876-1916）の自然主義小説の影響下にあると思われるが、マッカーシーが実際に彼らの作品を参照したかどうかは不明。マッカーシーの小説と自然主義の関係については Link を参照。
6. 『国境三部作』においては“vanish”という単語が頻出する。その用例が綿密に整理された Luce 164-66 を参照。
7. 初期原稿では「彼女は仲間を欲していたし、お腹のなかの子らも仲間を必要とするだろう（She needed them and her pups would need them）」と書かれていたように、牝狼の母性が強調されていたが、改稿の結果、牝狼の母性はあいまいになっている。*The Cormac McCarthy Papers* (Box 55, Folder 6) を参照。
8. ここで *All the Pretty Horses* においてサルティーヨ監獄の陰の支配人 Pérez が John Grady に対していう「ひとりの人間のなかには何らかの悪が存在しているのかもしれない。しかし我々はそれをその人間固有の悪だとは考えない。・・・メキシコでは悪はそれ自体で実在するのだ。自分の足で歩き回る存在なのだ（These can be in a man some evil. But we dont think it is his own evil. ... Evil is a true thing in Mexico. It goes about on its own legs [194-95]）」という言葉を想起してもいいだろう。
9. ビリーの両親はショットガンで撃たれ、殺害されたことになっていて、犯人は不明である（167）。*The Cormac*

*McCarthy Papers* (Box 55, Folder 6) 所収の初期原稿では、ビリーの父親が「斧でたたき切られた (chopped up with an axe)」こと、母親が台所でインディアンに食事を与えたこと、父親のブーツを履いたインディアンが両親殺害の翌日、ボイドを殺害しに戻ってきたことが書かれており、インディアンの犯行が明示されていた。また、1970年代後半にスクリーン・プレイとして構想された *Cities of the Plain* の初期原稿 (同 Box 69, Folder 9) には、「子供の頃、アパッチ・インディアンがコーヒーや食事をもとめて家の裏手にやってきたものだった ([W]hen I was a kind Apache Indians used to come to the back door to ask for coffee and meal)」というビリーの言葉があるが、後の原稿では削除されている。

10. アガンベン『ホモ・サケル』からの引用は基本的に高桑和巳訳を使用させていただいた。ただし、我々の文脈においては、原語の *loup garou* の訳は「狼男」ではなくジェンダーの縛りのない「狼人間」の方が適当と考え、そのように修正させていただいた。
11. アガンベンによれば、「殺害可能だが犠牲化不可能な生」が捉えられた圏域は「主権の圏域」と呼ばれる。それは「供犠の執行と殺人罪のあいだ」の「不分明地帯」であり、「殺人罪を犯さず、供犠を執行せずに人を殺害することのできる圏域」とされる (『ホモ・サケル』120)。
12. 初期原稿 (*The Cormac McCarthy Papers* [Box 55, Folder 6]) では、ビリーは牝狼を銃殺することではなく、重傷を負った牝狼と闘技場を出て行く。牝狼は道中で息絶えることになるが、焚き火のそばでビリーと牝狼が寄り添って眠るなど、親密になった両者の関係も描かれている。
13. このことに関連し、Luce は “[ビリー] は自身の苦痛を深くは感じない術、あるいは意識的に認識しない術を学んだのだ ([Billy] has learned not to feel so deeply his pain . . . or to acknowledge it consciously [162])” と述べている。人間はこの地上において、まやかしにすぎない自身の意識や意志に捕われていて、全体 (Matrix) から切り離された流刑状態にあるとする Jakob Bohme (1575-1624) の神秘思想を引く論者も多い。Arnold を参照。
14. この点については、『越境』の成長物語 (Bildungsroman) 的側面とウェスタンの側面の相克という観点からも捉えることができるだろう。これに関連し、James D. Lilley は “Whereas the *Bildungsroman* is driven forward by a quest for novelty, Westerns are necessarily retrospective, repetitive and elegiac, driven by a desire to repeat and relive the established patterns and plots of the past” (274; italics original.) と指摘している。

## 引用文献

- Arnold, Edwin T. “McCarthy and the Sacred: A Reading of *The Crossing*.” Lilley 215-38.
- , and Dianne C. Luce, eds. *A Cormac McCarthy Companion: The Border Trilogy*. UP of Mississippi, 2001.
- Brown, David E, ed. *The Wolf in the Southwest: The Making of an Endangered Species*. Tucson: U of Arizona P, 1983.
- Cant, John. *Cormac McCarthy and the Myth of American Exceptionalism*. New York: Routledge, 2008.
- Coates, Peter. “State of the Art: Chances with Wolves: Renaturing Western History.” *Journal of American Studies* 28.2 (1994) : 241-54.
- Frye, Steven, ed. *The Cambridge Companion to Cormac McCarthy*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- Hassan, Ihab. *Radical Innocence: Studies in the Contemporary American Novel*. Princeton: Princeton UP, 1961.
- Lilley, James D., ed. *Cormac McCarthy: New Directions*. Albuquerque: U of New Mexico P., 2002.
- . “‘The Hands of Yet Other Puppets’: Figuring Freedom and Reading Repetition in *All the Pretty Horses*.” Wallach 272-87.
- Link, Eric Carl. “McCarthy and Literary Naturalism.” Frye 149-61.
- Lopez, Barry Holstun. *Of Wolves and Men*. New York: Scribner’s, 1978.
- Luce, Dianne. “The Vanishing World of Cormac McCarthy’s Border Trilogy.” Arnold and Luce 161-97.
- McCarthy, Cormac. *All the Pretty Horses*. New York: Vintage, 1993.
- . *The Cormac McCarthy Papers*. 1964-2007. MS and TS. Alkek Lib. Texas State University, San Marcos.
- . *The Crossing*. New York: Vintage, 1995.
- Robisch, S. K. “The Trapper Mystic: Werewolves in *The Crossing*.” Wallach 288-92.
- Sanborn, Wallis R. *Animals in the Fiction of Cormac McCarthy*. Jefferson: McFarland, 2006.
- Scoones, Jacqueline. “The World on Fire: Ethics and Evolution in Cormac McCarthy’s Border Trilogy.” Arnold and Luce 131-60.
- Seton, Ernest Thompson. *Wild Animals I Have Known, and 200 Drawings*. New York: Scribner’s, 1898.
- Wallach, Rich, ed. *Myth, Legend, Dust: Critical Responses to Cormac McCarthy*. Manchester: Manchester UP, 2000.
- Woodward, Richard B. “Cormac McCarthy’s Venomous Fiction.” *New York Times Magazine* 19 Apr. 1992: 28-31+.

アガンベン, ジョルジョ『アウシュヴィッツの残りのもの—ア

ルシーヴと証人』上村忠男・廣石正和訳, 月曜社, 2001年。

…『ホモ・サケル—主権権力と剥き出しの生』高桑和巳訳, 以文社, 2003年。

今泉吉晴「訳注」『カランポーのオオカミ王ロボ』アーネスト・

T・シートン作・絵, 今泉吉晴訳, 福音館書店, 2003年。

76-86.

浜口吉隆「高慢」『新カトリック事典』II巻, 新カトリック大

事典編纂委員会編, 研究社, 1998年。852-53.